西洋画のやうな日本画

芥川龍之介

中央美術社の展覧会へ行つた。

行つて見ると三つの室に、七十何点かの画（ゑ）が並んでゐる。それが皆日本画である。しかし唯の日本画ぢやない。いづれも経営惨憺（けいえいさんたん）の余（よ）になつた、西洋画のやうな日本画である。まづ第一に絹や紙へ、日本絵具をなすりつけて、よくこれ程油絵じみた効果を与へる事が出来たものだと、その点に聊（いささか）敬意を表した。

そこで素人（しろうと）考へに考へて見ると、かう云ふ画を描く以上、かう云ふ画の作者には、自然がかう云ふ風に見えるのに違ひない。逆に云へばかう云ふ風に自然が見えればこそ、かう云ふ画が此処（ここ）に出来上つたのだから、

一応(いちおう)は至極御尤(しごくごもつと)もである。が、素人(しろうと)はかう云ふ画を見ると、何故(なぜ)これらの画の作家は、絵具皿の代りにパレツトを、紙や絹の代りにカンヴアスを用ひないかと尋(たづ)ねたくなる。その方が作者にも便利なら、僕等素人の見物にも難有(ありがた)くはないかと尋ねたくなる。

　しかしこれらの画の作者は、「我々には自然がかう見えるのだ。かう見えると云ふ意味は、西洋画風にと云ふ意味ぢやない。我々の日本画風にと云ふ意味だ」と、立派(りつぱ)な返答をするかも知れない。よろしい。それも心得た。が、これらの画の中には、どう考へても西洋画と選ぶ所のない画が沢山(たくさん)ある。たとへば吉田白流(よしだはくりう)

氏の「奥州路」の如き、遠藤教三氏の「嫩葉の森」の如き、乃至穴山義平氏の「盛夏」の如きは、皆この類の作品である。もし「我々の日本画風」が、かう云ふものであるとすれば、それは遺憾ながら僕なぞには、余り結構なものとは思はれない。まづ冷酷に批評すると、本来剃刀で剃るべき髭を、薙刀で剃つて見せたと云ふ御手柄に感服するだけである。さうして一応感服した後では、或は剃刀を使つた方が、もつとよく剃れはしなかつたらうかと尋ねたくなるだけである。

尤も七十何点かの画が、悉くこの種類だと云ふ次第ぢやない。たとへば畠山錦成氏の「貴美子」の如

きは、少くともかう云ふ西洋かぶれの幣は受けてゐない作品である。如何に奇抜がつた所が、せめて此処までは漕ぎつけてゐないと、どうも僕等素人には、ちと新しい日本画としてのレエゾン・デエトルが覚束ないかと思ふ。もつと書きたい事もないではないが、何しろ原稿を受け取りに来た人が、玄関に待つてゐる始末だから、今度はまづこの辺で御免を蒙る事にする。悪口は岡目八目の然らしむる所以だと大目に見て頂きたい。（九・七・十八）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。